

上杉本洛中洛外図屏風注文者 近衛氏の生涯

小谷量子

〔要旨〕 十二代將軍足利義晴御台近衛氏慶寿院は、上杉本洛中洛外図屏風注文者である。上杉本を理解するには、慶寿院の生涯を知ることが重要である。また、『桑実寺縁起絵巻』は、慶寿院結婚のために制作された可能性が高い。

慶寿院は関白太政大臣近衛尚通息女として永正十一年（一五一四）に生まれた。室町期の將軍御台は、日野家から出るのが通例であったが、慶寿院は摂関家から初めて將軍に嫁ぎ、十三代將軍義輝・十五代將軍義昭を生んだ。そして、永禄八年（一五六五）三好義繼・松永久通、三好三人衆の急襲による永禄の政変により、五十二歳で息子である十三代將軍義輝と共に武衛御所で殺された。

義晴・義輝期は、慶寿院の兄弟である近衛種家・聖護院道増・大覚寺義俊・久我晴通が將軍近江没落に随行し、諸大名の調停役を務めるなど幕府を支えており、「足利―近衛体制」期と言われる。慶寿院は、將軍御台・母という以上に重要な地位にあり、義輝期將軍家家長であったと思われる。そして、「足利―近衛体制」を解明するには、近衛家と將軍家を結ぶ要であった慶寿院の役割を検討することが重要である。

慶寿院は外戚として近衛家が力をふるうための駒ではなく、慶寿院を支えるために近衛家兄弟は義晴・義輝政権と一体化し、それによって、近衛家を守るうとした。「足利―近衛体制」は慶寿院の存在によって生まれた体制なのである。

上杉本洛中洛外図屏風は、何度も京都退去を余儀なくされた將軍家の洛中

洛外への思いと、天下静謐の祈り、夫義晴の遺志を継ぎ將軍家を守ろうとした慶寿院の思いが込められているのである。

「キーワード」…慶寿院、上杉本洛中洛外図屏風、桑実寺縁起絵巻、近衛兄弟、足利義輝

はじめに

米沢市上杉博物館蔵『上杉本洛中洛外図屏風』は国宝で、永禄八年（一五六五）頃制作された狩野永徳筆の作品である（図1）。

筆者は前稿において、『上杉本洛中洛外図屏風』は足利義晴追善記『穴太記』を描く歌・物語絵であり、注文者は十二代將軍足利義晴御台近衛氏慶寿院であることを明らかにした^①。上杉本を理解するには慶寿院の生涯を知る必要があるだろう。

慶寿院は関白太政大臣近衛尚通息女として永正十一年（一五一四）に生まれた（系図1^②）。室町期の將軍御台は、日野家から出るのが通例であっ



右隻

左隻



図1
上杉本洛中洛外図屏風
米沢市上杉博物館蔵

たが、慶寿院は摂関家から初めて将軍に嫁ぎ、十三代将軍義輝・十五代将軍義昭を生んだ(系図2)。そして、永禄八年(一五六五)三好義継、松永久通、三好三人衆の急襲による永禄の政変により、五十二歳で息子である十三代将軍義輝と共に武衛御所で殺された^③。

義晴・義輝期は、慶寿院の兄弟である近衛植家・聖護院道増・大覚寺義俊・久我晴通が将軍近江没落や北白川城入城にも随行し、諸大名の調停役を務めるなど幕府を支えており、「足利―近衛体制」期と言われる。室町幕府の歴史の中でも、非常に特異な政治体制の原因を、近衛家が外戚であったという点だけに求めることはできないであろう。高梨氏は、当該期の近衛一族を従来の幕府政治における側近公家衆に代わる存在と位置づけ、幕府による公家支配の末期の様相と捉えている^⑥。黒嶋氏は、永禄の政変の原因を「近衛家という権威と密着した将軍を廃することにあった」と推測している^⑦。

まず、戦国期近衛家の研究を概観しておこう。戦国期近衛家に関する研究は、高群逸枝氏^⑧、湯川敏治氏^⑨、柴田真一氏^⑩の近衛尚通・植家期の近衛家の家族構成に関する論稿がある。湯川氏の「足利義晴期の近衛家の動向―植家と妹義晴室を中心に―」は、慶寿院に焦点を当てた唯一の論考だが、中心は近衛家当主植家である。

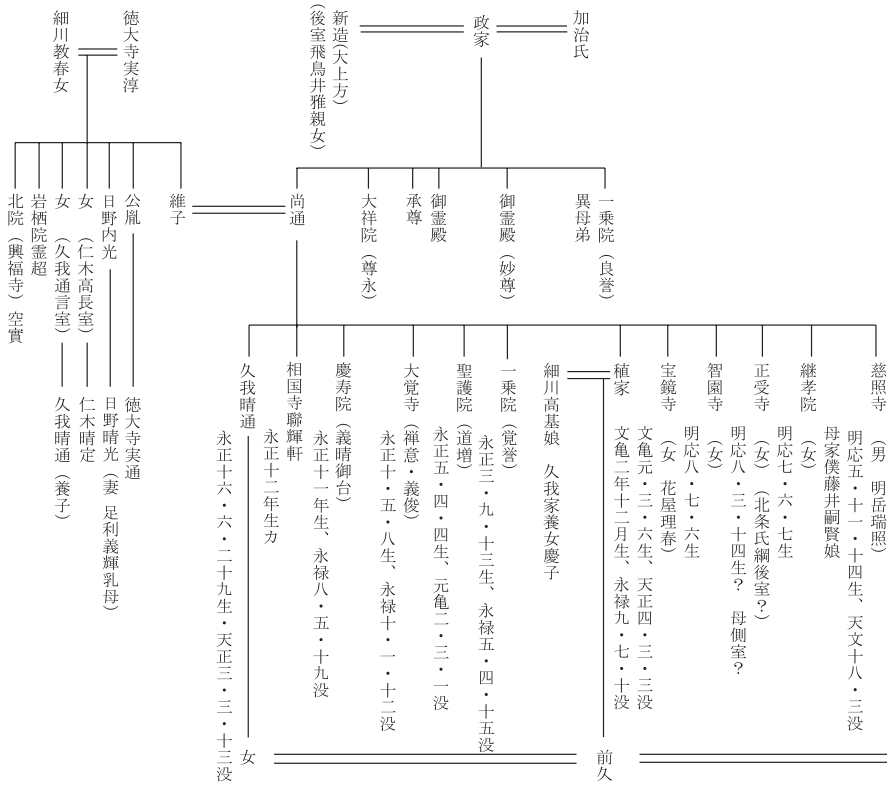
また、近衛一族と義晴・義輝期幕府政治の関係について、高梨真行氏^⑪、黒嶋敏氏^⑫、水野智之氏^⑬、木村真美子^⑭、金子拓氏^⑮等の論考がある。さらに、近衛一族のみならず、従弟である徳大寺実淳息岩栖院(梅仙軒)霊超も、対伊予河野氏外交を担う「近衛ルート」の一員であったことが明らかになっている^⑯。しかし、近衛一族が義晴・義輝期に將軍側近として活躍することになる要であった慶寿院に関しては、各論稿で触れられるのみである。

系図1 近衛家

参考文献

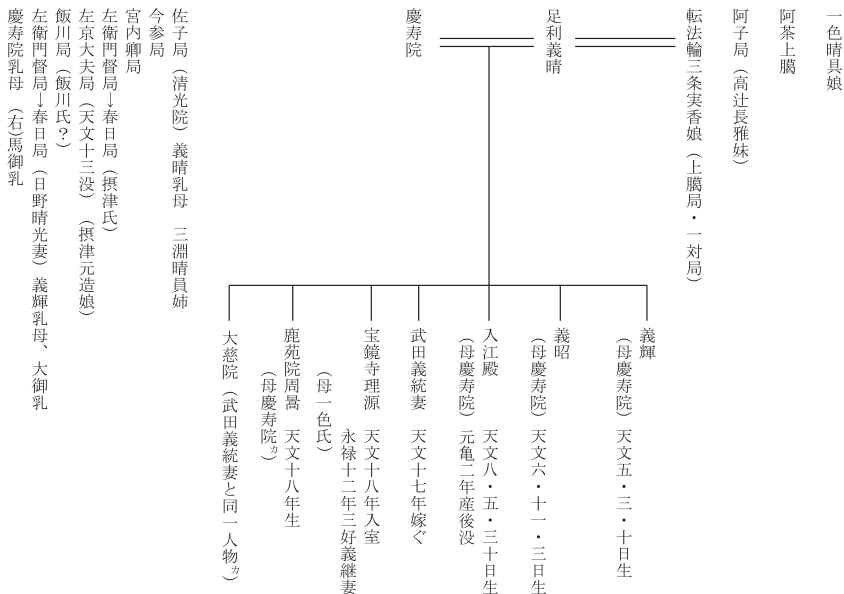
高群逸枝『平安鎌倉室町家族の研究』、柴田真一「近衛尚通とその家族」、湯川敏治「中世公家家族の側面」「戦国期公家女性生活」、木村真美子「大覚寺義俊の活動と近衛家」将軍足利義晴と朝倉孝景の關係を中心に」

武田氏女青春院妹室樹院



系図2 足利義晴・慶寿院の子どまと女房衆

設楽薫「将軍足利義晴の嗣立と大館常興の登場」、羽田聡「室町幕府女房の基礎的考察」、『鹿苑日録』『言継卿記』『穴太記』『大館常興日記』『公卿補任』『実隆公記』『後鑑』『史料稿本』『尊卑分脈』を参照して作成。



さらに、義晴・義輝期の女房の研究は、羽田聡氏⁽¹⁷⁾・設楽薫氏⁽¹⁸⁾・平山敏治郎氏⁽¹⁹⁾・菅原正子氏⁽²⁰⁾等の論稿があるが、將軍御台についての専論は室町期を通じて日野富子以外にはない。また、義晴・義輝期の政治情勢に関して、近年多くの研究が重ねられているが、義晴・義輝期を幕府側から通史的にまとめた論考は少ない。

慶寿院が近衛家息女の慣例である寺院入室をせず、將軍家に嫁いだ理由と経緯、そして、義晴・義輝期における役割は現在明らかではない。しかし、慶寿院は多くの史料に散見され、幕府内で、將軍御台・母という以上に重要な地位にあり、義輝期將軍家家長であったと思われる。そして、「足利―近衛体制」を説明するには、従来のように、近衛家の男性だけでなく、近衛家と將軍家を結ぶ要であった慶寿院の役割を検討する必要がある。

慶寿院は外戚として近衛家が力をふるうための駒ではなく、慶寿院を支えるために近衛家兄弟は、義晴・義輝政権と一体化し、それによって、近衛家を守ろうとした。「足利―近衛体制」は慶寿院の存在によって生まれた体制なのである。本稿はこれまで看過されてきた慶寿院について検討し、その生涯を追いたいと思う。

第一章 近衛家息女時代

慶寿院の本名は不明である。そこで、本稿では少女時代も含め「慶寿院」と表記する。まず、慶寿院の兄弟を確認しておこう（系図1参照）湯川氏によれば近衛尚通正妻徳大寺維子の子は七人で、慶寿院は、維子の子ではないとされる。その根拠は不明だが、『後法興院記』『後法成寺関白記』に誕生の記事がないためだと思われる。しかし、家督を継いだ

次男植家も『後法興院記』に誕生の記事がなく、文亀二年十二月二十九日条に「細河六郎就若公誕生為礼来」とあることから、文亀二年十二月生まれと推定される。また、久我晴通は『公卿補任』が母を維子とし、しかも久我晴通の出生記事が『後法成寺関白記』にあるのだが、湯川氏が挙げた七人の維子出生の子に含まれていない。湯川氏は、継孝院・智園寺・宝鏡寺・一乗院・聖護院・大覚寺の六人が『後法興院記』『後法成寺関白記』から数えられるとしている。そして、この六人と植家を維子腹としているのである。久我晴通を数え洩らしたのであろうか。『後法成寺関白記』は、永正三〇十年は欠落がないが、永正十一・十二年が欠落している。慶寿院が永正十一年生まれであるため、誕生の記事がないのである。慶寿院を側室の子とする根拠はないように思われる。

なお、湯川氏は尚通の子女を十一人とするが、柴田氏は聯輝軒・正受寺（女）も子女である可能性が高いとする⁽²¹⁾。

『後法成寺関白記』中で慶寿院は、「小女」「姫君」「姫君御料人」「御台」と成長するにつれて呼び方が変化していく。慶寿院に関する最初の記事は、永正十三年二月十三日条である。「去夜小女発虫令絶入間、今朝召（高小路資直）彈正少弼、即来送良薬」と、夜泣き・疳の虫がひどく高小路資直が呼ばれた。大永三年（一五二三）閏三月十九日にも、日記の行間に補書で、「少女俄歡樂之間、召宝樹院、即来進良薬」とある。同四月にも「姫君此間不例、進良薬之間百疋遣之」、同年十月には「小女風氣也、二位法眼進上良薬、余令対面」とあり、大永六年七月も行間補書で慶寿院の病気を記している。尚通は慶寿院の病気を小まめに日記に記し、医者に直々会うこともあった。尚通四十三歳の時の子で、末娘として父にかわいがられたようである。

次に、家族との外出が多く見られるので『後法成寺関白記』からいく

つか見ていこう。永正十六年五月九日（六歳）尚通・義俊と今宮祭を見物し、帰りに従弟の徳大寺実通（七歳）が近衛家に遊びに来ている。

永正十七年（七歳）、尚通、姉四人、義俊と共に御霊祭を見物し、帰りに母方の叔父日野内光の家に行った。大永三年（十歳）、母維子と二人で、貴船・鞍馬へ参詣した。

享禄元年（十五歳）四月は、一家で清水寺へ参詣し、双林寺で兄慈照寺の振舞いを受けた。

享禄二年二月（十六歳）、尚通・植家・義俊・維子と共に、貴船・御霊社・鞍馬へ参詣し、同年十月にも一家で鞍馬参詣をし宿泊した。享禄三年（十七歳）にも、維子と二人で鞍馬参詣をしている。また、同年九月は、家族そろって清水へ松茸狩りにいき、山中で宴があった。これ以外にも家族での遊覧が多く記されている。慶寿院は家族と共に、度々寺社参詣に行き、時には維子と二人で出かけることもあった。また、生見玉が毎年、子女や妹から尚通に進上され、子どもたちが集まり祝っている。

このように、近衛尚通家は家族の結束が強い家で、寺院に入室した兄・姉も頻繁に近衛家を訪れ、家族そろっての外出や行事が数多く行われている。母方の実家徳大寺家とも頻繁な交流が見られる。同時代の『実隆公記』や『二水記』には、家族で遊覧する記事や、家族が集まって会食する記事はほとんど見られない。近衛尚通の日記は他の公家日記に比べ、家族での遊覧や会食の記事が目立って多いのである。これは、近衛家が生活に余裕があったこと、大家族であったことも一因だが、尚通が家族を大切にし、一家としての結束意識が強かったためと思われる。後に「植家・道増・義俊・久我晴通が「幕府―近衛体制」と呼ばれるように、一族を挙げて義晴・義輝政権を支える基盤は、尚通一家の結束の固さに

あるだろう。

享禄四年十二月（十八歳）、かもじをつける祝いが行われた。成人の祝いである。姉の宝鏡寺は十三歳で入室しているが、尚通は慶寿院を尼僧にするつもりがなかったのである。近衛家息女は慶寿院以外、全て寺院に入室している。しかし、尚通はこの頃すでに、慶寿院を將軍家に嫁がせるつもりだったのであろう。

二十歳過ぎまで尚通・維子と共に暮らした子どもは慶寿院のみであり、兄弟姉妹に会う機会が、姉妹の中で最も多かった。そして、慶寿院が誕生した時には、すでに姉四人は入室しており、男兄弟の中の唯一の女子であった。

第二章 義晴御台時代

一、結婚と「桑実寺縁起絵巻」

天文三年（一五三四）慶寿院は、二十一歳で十二代將軍義晴（二十四歳）御台となった。母維子が十七歳、日野富子が十六歳で嫁いでいることに比べると、当時としては遅い結婚であった。当時義晴は、六角定頼の庇護の元、近江長光寺・桑実寺に享禄四年（一五三一）以来逗留していた。義晴の桑実寺における在所は、後の永禄十一年（一五六八）、織田信長と共に義昭が上洛した際逗留した正覚院とされる。

結婚前の享禄五年（天文元年）、義晴は三条西実隆・土佐光茂に「桑実寺縁起絵巻」（滋賀県近江八幡市桑実寺蔵、重要文化財）を制作させている。土佐光茂が桑実寺を訪れ、現在石仏巡り「第一番」の岩の上から見た実景を基に描いたとされる。

絵巻詞書きは三条西実隆の作で、絵巻上巻は阿閉皇女（後の元明天皇）

の病氣快癒にまつわる、藤原不比等の兄定恵による法会と薬師如来の出現、下巻は桑実寺の繁栄と、元明天皇の桑実寺行幸、薬師如来・日光月光菩薩の飛来が主題である。後述するように義晴・慶寿院の縁談が同年八月初旬から具体化している。「桑実寺縁起絵巻」制作時期が、慶寿院縁談の時期と重なるのである。「桑実寺縁起絵巻」制作は、慶寿院に見せることが真の目的だった可能性がある。この点について検討したい。

①この絵巻の主題は、神仏の飛来を除けば、上巻が阿閑皇女病氣快癒にまつわる近江と藤原氏のゆかり譚である。

②下巻の主題は高貴な身分の女性が桑実寺にやって来るといふ点にある。

③この絵巻の特色は異例ともいえる桑実寺周辺の実景描写にある。

④制作者の顔ぶれは、土佐光茂、三条西実隆、後奈良天皇、尊鎮法親王である。

⑤義晴の絵巻制作依頼の最初の書状は、享祿五年正月二十一日、医者である上池院から実隆にもたらされた。⁽³⁰⁾ 上池院は尚通の日記に度々登場し、近衛家を頻繁に訪れている。

⑥この前年の享祿四年、細川晴元と細川持隆が争い、翌五年(天文元年)一月、三好元長軍が柳本を殺害したため、細川晴元は元長を折檻しようとし、細川持隆の仲裁で、元長等は髻を切った。⁽³¹⁾ これは、上池院が実隆に「桑実寺縁起絵巻」詞書依頼を渡した時期に当たる。六月、「堺幕府」(義晴異母兄弟義維)を支える細川晴元と三好元長の対立により元長が自刃し、義維も十月に出奔した。⁽³²⁾ 天文二年には義晴と晴元が和解したことが確認できる。⁽³⁴⁾

⑦六月二十三日に外題・中書等悉く土佐光茂に渡され、ほぼ完成に近かった。

た。

⑧天文元年八月十七日桑実寺に絵巻が奉納され、この間二ヵ月程度の空白がある。

⑨この空白期間である七月下旬上池院が近衛家を訪れ、八月上旬に桑実寺より近衛家に使者が来ている。

慶寿院結婚の幕府側の交渉相手として、佐子局が考えられる。佐子局は、三淵晴員の姉で、義晴乳母である。『大館常興日記』紙背文書に「そのころ御き、れいしきの御けちなともせい光院へ申候てなされ候つ(高円存命の頃)る、まして御ないしよなどの御事、せい光院御そんち候へてハにて御さ候」と、義晴が在京中の將軍下知は佐子局を通じて行われ、御内書も佐子局が全て承知していた。享祿二年七月、下京地子を柳本賢治に申し付ける佐子局が申沙汰した奉書が出されていることから、京都退去後も同様の地位にあったものと思われる。尚通の日記には、義晴京都退去後も佐子局との音信が度々記録されている。⁽³⁷⁾

実隆が「桑実寺縁起絵巻」外題・詞書などをすべて土佐光茂に渡した一ヵ月後の、天文元年(一五三二)七月二十八日、先述したように上池院が近衛邸に来訪した。そして、八月九日に「去夜従左五局岸部来、種々申子細有之」、天文二年正月二十三日「従御佐子局有御返事」天文二年九月「御左五局アカ子小袖遣之」と尚通の日記に記されている。八月に佐子局からの使者が来訪し色々相談することがあり、その返事が翌年の正月に届いた。そして、天文二年九月に小袖を佐子局に贈った。書状ではなく、使者が近衛邸に訪れ相談していること、返事が届くまで五ヵ月かかっていること、それまでの両者間の贈答は、食物であるが、この場合のみ小袖を贈っていることを勘案すると、佐子局との間で、慶寿院嫁入りの事が相談されたのではないだろうか。そして、天文二年十一月

桑実寺より使節が上洛している⁽⁴¹⁾。この使者は正式に婚約が整った使者と見てよいだろう。

当時話題の絵画は、武士が制作したものであっても公家間で披見されていたことが確認でき、『実隆公記』には絵巻を披見した記事が多くみられる⁽⁴²⁾。そして、「桑実寺縁起絵巻」の前年に制作された「当麻寺縁起絵」は、「桑実寺縁起絵巻」の制作スタッフである土佐光茂・三条西実隆・後奈良天皇・尊鎮法親王と共に、近衛尚通・近衛植家・聖護院道増が制作にかかわっている⁽⁴³⁾。上池院が「桑実寺縁起絵巻」制作に関わっており、かつ「当麻寺縁起絵」の直後に制作され、ほぼ同スタッフで制作された將軍注文の絵巻を、近衛家が全く知らなかったとは考え難い。むしろ、「当麻寺縁起絵」で、上巻を天皇一族、中巻を近衛一族、下巻を三条西一族が分担しながら、続けて制作された「桑実寺縁起絵巻」に近衛一族が全く参加していないのは不自然なのである。

以上の点から、奉納以前に京都で、慶寿院が絵巻を見ていた可能性がある。現在「桑実寺縁起絵巻」の制作目的を、亀井若菜氏は「たとえ近江の一寺院にあっても、義晴は、天皇と共に中央の権力者として正統的立場にいるのだ⁽⁴⁴⁾」ということを感じさせるためであるとする。また吉田友之氏は、足利義晴が畿内諸勢力の調伏を祈願し、ラストシーンの十二神将の飛来は將軍擁護の軍勢の到来を告げるがごとくであるとする⁽⁴⁵⁾。このような従来の解釈によれば、義晴はあえてこのような絵巻を制作しなければならぬほど、將軍としての地位に不安を持ち、「桑実寺縁起絵巻」は義晴の空しい願いが込められた作品であったということになる。

しかし、「桑実寺縁起絵巻」を、京都で慶寿院が見ていたとすれば、「桑実寺縁起絵巻」は、その実景描写によって見知らぬ土地に嫁ぐ女性の不安を和らげ、藤原氏ゆかりの桑実寺に高貴な女性が行くという美

しい絵巻を制作してくれた義晴の思いに勇気づけられ、桑実寺へ行く決心をする絵巻だったといえる。慶寿院結婚の具体化は、「堺幕府」は崩壊し、義晴の京都復帰が可能と見た尚通の戦略であろう。

さて、將軍家御台は日野家から出るのが室町期の通例であり、摂関家から興入れすることは先例のないことだった。そこで、尚通が慶寿院を將軍に嫁がせた理由を探ってみた。

永正より大永年間の近衛尚通は、細川高国らと密接な親交を持ち、家門維持に努めていた。しかし、高国没落後の近衛尚通は、享祿元年五月十四日と二十四日に本願寺に荷物を預け、享祿二年には、息が入室する大覚寺・慈照寺の兵三百人を家領桂庄の警護に派遣した⁽⁴⁶⁾。

高国が享祿四年六月八日に自刃すると、十五日に家臣を近江、堺へ下し、本満寺に記録類を預けている⁽⁴⁷⁾。また、島津勝久⁽⁴⁸⁾、大友義鑑⁽⁴⁹⁾、大内義隆、北条氏綱ら有力大名とも連絡を持ち、娘（正受寺カ）を還俗させ北条氏綱の後室に入れた⁽⁵⁰⁾。その後も尚通は、細川持隆や、木澤長政⁽⁵¹⁾、本願寺光教と音信をするなど、情報収集・家門の維持に努めている。

高国・義晴が京都から近江に退いた享祿元年（一五二八）以降、京都には將軍・管領が不在で、「洛中似無守護武士稀有之式也⁽⁵²⁾」という状態であった。そして、京都周辺では小競り合いが続いていた。そのような状況の中で、近江に長らく滞在しているとはいえず、將軍義晴は、朝廷と交渉を持ち、公家もしばしば近江を尋ね、諸大名への栄典授与も行っており、義晴が唯一「公認の権威⁽⁵³⁾」と考えられていた。尚通は、高国滅亡後は義晴が最も頼りになると考えたのである。

尚通時代の近衛家領は、近衛政家の時代と比べ摂津・近江・美濃等の莊園は不知行になったところが多く、山城の五ヶ庄・桂殿が主要な所領であった⁽⁵⁴⁾。慶寿院の結婚は近衛家所領維持の切り札であり、尚通は幕府

と一体化することで近衛家存続を図ったのである。

なお、木村真美子氏は、天文二年正月二十九日に九条種通が関白宣下されると、近衛家と義晴が共同してこれを妨害したことから、天文元年以前に義晴と近衛家の連携が成立していたことは確実であるとしている。さらに、『後法成寺関白記』大永六年の紙背文書の、代々の將軍御台日野氏不快の例を書き上げた土代の存在から、尚通の息女を將軍に嫁がす計画は、高国存命中からあったのではないかとする。寺院入室の契約が幼少期になされることが多いことから推測すると、早くから慶寿院を義晴御台にと尚通が考えていたことは十分に考えられる。

さて、慶寿院結婚の行列は大変美麗であったが、夕立が降り雷も響き、到着した時、濡れて見苦しき体だった。六月八日から十日まで、三日間に渡り婚礼の式が行われた。六角定頼・義賢父子から十合十荷が進上され、祝儀料二十貫文は局料から支出した。当時局は宮内卿局のみであった。⁽⁶²⁾

結婚三週間後の天文三年六月二十九日、入京のため義晴・慶寿院は桑実寺から坂本に移った。⁽⁶³⁾そして、天文三年九月三日、義晴・慶寿院は南禅寺に入った。⁽⁶⁴⁾慶寿院が桑実寺に行ったことが、義晴に京都早期復帰を促したのではないだろうか。

慶寿院結婚後の近衛家は、義晴政権と深く関わっていた。天文五年九月三日大内義隆雑掌が近衛家に來訪し、尚通・種家・義晴への献上品を尚通に渡した。翌日大館晴光が近衛家を訪れ、尚通から大内の要望を伝えた。十六日には、義晴から種家が將軍邸に呼ばれ、大内の要望を相談した。大内の要望は、吉田兼右と猪熊兼永（平野神主）との吉田神道をめぐる相論で、兼永を支持していた大内義隆が、近衛家を通じ義晴に裁許を求めたとされる。大内は近衛家を通じての交渉が最も有利であると

考えたのである。十月十八日に、大館常興・晴光・朽木種綱・細川高久・摂津元造・荒川氏隆・海老名高助・本郷光泰が近衛邸に集まり談合した。この八人は、この年義晴が編成した「内談衆」で、幕政の中心メンバーであった。このように、近衛家は義晴への取次となるとともに、有力な相談役であった。

天文八年、慶寿院の母維子より、伊予河野通直を相伴衆にするよう口入があり、天文九年河野通直は相伴衆に加えられた。天文十一年頃からは維子の弟岩栖靈超（梅仙軒）が対伊予外交で活躍している。⁽⁶⁵⁾

天文五年十月二十七日、前月上洛した細川晴元、近衛尚通の子女七人、入江殿（松山聖繁 義尚娘）を將軍邸に招き能があった。⁽⁶⁶⁾翌閏十月五日に晴元申沙汰の能が將軍邸で行われており、これは返礼と思われることから、十月の宴は晴元上洛を賀すためであろう。その席に近衛一族が入江殿とともに参加したのは、近衛家が「將軍御一家」であったためであろう。

天文十七年に義晴が細川邸に御成を行った。近衛種家・久我晴通・聖護院道増・一乗院覚誉・大覚寺義俊・飛鳥井雅綱・勤修寺尹豊・鳥丸光康・高倉永家・日野晴光が義晴・義輝の座敷に同席した。⁽⁶⁷⁾飛鳥井以下の五名は武家側近公家衆である。⁽⁶⁸⁾近衛一族の参加は、側近公家衆のような將軍との主従関係によるものではない。近衛一族の参加理由は、「將軍御一家」であるためと捉える以外ないだろう。

天文九年、細川晴元が踊りをお目に懸けたいと、近衛種家を通じて申し入れてきた。⁽⁶⁹⁾この時大館常興は、近衛種家を「御里御所様」と記している。近衛種家は義晴一家と一体化した將軍一族であった。

二、子ども

次に慶寿院の子どもを見ていこう。天文五年三月に、義晴嫡男義輝が生まれた。慶寿院産所に久我晴通が出仕し、維子も度々産所へ通った。産所総奉行は慣例により二階堂有泰が務め、費用は細川晴元・河内畠山在氏・能登畠山義総・越前朝倉孝景・若狭武田元光が負担した。彼らは、義晴政権を支える中心的守護であった。

義輝が誕生すると公武の人々が多数近衛家に祝い訪れ、義輝は尚通の猶子となった。乳母には維子の甥日野晴光の妻が選ばれた。そして、産着は管領が用意するのが慣例であったが、管領不在のため近衛家が用意した。維子は慶寿院の出産に七日間付き添い、尚通は七日目の祝いに、俄に義晴と呼ばれ、植家・聖護院道増・一乗院覚誉・久我晴通・慈照寺等と共に將軍邸に行った。

同年閏十月に義輝が病氣をした際は、維子が將軍邸に呼ばれ、快癒まで十二日間將軍邸所に詰めた。尚通は三日間芝薬師に詣で、尚通妹・宝鏡寺・継孝院も將軍邸所へ行き、聖護院も加持祈祷のため將軍邸所へ行き、大覚寺は快癒祝いと思われる田楽を將軍邸で振る舞った。

他の公家の日記では、実家の母が娘の嫁ぎ先に詰めるという例はほとんど見当たらない。義晴は父義澄の亡命先で生まれ、誕生後まもなく赤松に預けられ家族がいなかった。そうしたことも、近衛一族が「將軍邸一家」として將軍家と一体化した一因である。慶寿院は近衛家を頼りとし、義晴夫妻は近衛家の一員だったのである。

高群逸枝氏によれば、同時代の三條西家では、九条家に嫁いだ娘の出産に実家の母が立ち会うことはなく、産後も妻の実家が娘の婚家を見舞うことは遠慮された。嫁取婚が確立した時期なのである。しかし一方で、旧態である妻問婚も三条実望は公認されており、結婚形態の過渡期で

あったといえる。慶寿院は將軍家に嫁いだが、近衛家の意識的には招婚婚に近いものがあつたのではないだろうか。義晴夫妻は近衛家の一員であり、近衛家は將軍一族であつた。そのため近衛一族が義晴近江没落にも同行したのである。

天文法華の乱が収まり、丹波を中心に活動していた高国弟晴国が自害した天文五年十二月十一日、義晴・慶寿院・義輝は、北小路室町伊勢貞孝邸に移り、入洛の祝いに植家・聖護院・久我晴通が参上した。九代將軍義尚は、産所から直接伊勢貞親の許へ行き、伊勢氏の下で養育されている。七代義勝も産所から伊勢邸に移り、伊勢貞国の屋敷で育てられた。將軍家嗣子は伊勢邸で養育されるのが慣例であつた。しかし、義輝の場合は、義晴・慶寿院が伊勢邸に移り、慶寿院は義輝を手元で育てた。翌天文六年十一月、次男義昭（一乗院覚慶）が誕生し、天文八年五月に長女（後の入江殿）が誕生した。その他の子どもは、永祿の政変で死亡した鹿苑院周高を、『尊卑分脈』では慶寿院出生とするが、管見では誕生の記事が見当たらない。その他に、天文十七年若狭国武田義統に嫁いだ娘がいた。また、天文十八年宝鏡寺に入室し、永祿十二年（二五六九）、織田信長の仲介で三好義継と結婚した理源は、一色晴具の娘が母とされる。義晴の子どもは、義昭・理源が慶寿院兄弟姉妹の許に入室した。また、入江殿は近衛家に隣接し、義尚娘が門主であつたが、天文八年、「近衛殿近年居入江殿」と、植家は入江殿に住んでおり、近衛家と入江殿は一体化していた。

さらに、久我晴通の妻は武田元光（元信娘の説もある）の娘であるから、義晴の娘は久我晴通の妻の実家に嫁いだ。この他に、『尊卑分脈』は大慈院に入室した慶寿院出生の女子を記すが、これが武田氏に嫁いだ人物と同一人物なのか、別人なのか不明である（系図2参照）。

理源の宝鏡寺入室には久我晴通が付き添っている。晴通はこうした内向きの事柄に関わっていたが、天文二十二年世上の事について慶寿院に意見したが、受け入れられず突如出家している。晴通の発給文書は、全て出家後のものとされる。⁽⁹⁰⁾表向きことは植家、諸大名との交渉は大覚寺義俊・聖護院道増、内向きの事柄は久我晴通というように、兄弟の中で役割分担があったのではないかと思われる。

三、義晴死までの動向

次に、義晴死までの動向を見ていこう。天文五年九月細川晴元が上洛⁽⁹¹⁾し、三好長慶・木澤長政・波多野秀忠等を供として義晴に出仕した。⁽⁹²⁾翌天文六年に細川晴元と六角定頼の娘が結婚し、義晴政権を支える「細川―六角体制」ができた。同年八月細川晴元は右京大夫に任じられ、義晴政権は細川高国没落以来漸く安定した。天文八年二月からは今出川御所の作事が始まった。⁽⁹³⁾天文九年には今出川御所に移徙したのではないかとされる。⁽⁹⁴⁾

天文八年六月、三好長慶は河内十七箇所の代官職を望んだが、同族の三好政長を重用していた細川晴元はこれを拒否した。これにより晴元と長慶間に内紛が起き、戦闘寸前となった。そのため、閏六月十六日、慶寿院と義輝は八瀬の佐子局（清光院）の許に避難した。義昭が同行したのかは不明である。五月二十九日に誕生したばかりの長女は、七月十日に八瀬へ移った。慶寿院は義輝を守ることを最優先し、産後であったが長女を置いて、自ら同行した。七月になり、六角定頼・足利義晴の調停により、三好長慶は摂津芥川城（高槻市）を撤退し越水城（西宮市）に移った。⁽⁹⁵⁾

天文十年、細川高国党塩川国満を細川晴元被官三好政長・三好長慶ら

が攻め、塩川は木澤長政に救援を求めた。木澤長政は細川晴元の被官であったがこれに応じ、さらに細川晴元被官の内部対立も表面化した。そして、木澤長政は義晴に京都警固を申し出た。⁽⁹⁶⁾細川晴元は岩倉に退去し、その際義晴の同行を求めたが義晴は同意せず、しかしながら木澤に与同することも拒否し、義晴一家は近江坂本に退去した。この時は近衛植家・大覚寺義俊・久我晴通も坂本へ同行した⁽⁹⁷⁾『公卿補任』は「関白随大樹徒歩出奔、先代未聞」とする。公家たちにとっても近衛一族の随行は異例であった。翌天文十一年三月、木澤長政は敗死し、義晴一家は京に戻り、相国寺法住院（義澄位牌所）に入り、その間に今出川御所に掘を普請し、四月八日今出川御所に入った。⁽⁹⁸⁾法住院に入った頃、『歴博甲本洛中洛外凶屏風』（国立歴史民俗博物館蔵）が発注されたと推測される。

天文十五年九月十二日、義晴一家、近衛植家らは慈照寺へ移った。細川氏綱の重臣細川国慶が入洛したためで、国慶は嵯峨に逃れた細川晴元を追撃した。十二月十八日義晴一家・植家・聖護院道増・久我晴通は義輝元服のため坂本に行った。細川晴元は京都から播州神尾に敗走していた。そのため、六角定頼を加冠役とし、義晴は義輝（十一歳）に將軍職を譲り、自身は義輝を後見する「大御所」となり、右大将に任官した。⁽⁹⁹⁾翌年正月、義晴右大将、義輝元服の参賀を慈照寺で受けており、義晴一家は引き続き慈照寺に留まっていた。⁽¹⁰⁰⁾

天文十六年三月、義晴・義輝は細川晴元・三好長慶と対立し北白川城に入城した。⁽¹⁰¹⁾これは、細川氏綱・国慶と結んでいたためとされる。近衛植家・聖護院道増・大覚寺義俊も同行したことから、慶寿院も同行したと思われる。四月一日、晴元軍は東山を取り巻き、吉田から北白川一帯に放火した。七月十九日、晴元軍・六角軍に包囲された義晴は、城を自焼して坂本に退去し、二十九日細川晴元・六角定頼と和解した。⁽¹⁰²⁾閏七月、

高雄・梶尾に城を構えた細川国慶を晴元が攻撃し、高雄城は落城し、神護寺・梶尾が焼失した。⁽¹⁰⁾

同年十一月、四国から足利義維が堺に上陸した。⁽¹⁰⁾ この知らせは九条種通から証如にもたらされ、証如は翌日千疋を九条に贈り義維を助成して

いる。
天文十七年六月七日、義晴一家・近衛一族は坂本から京に戻った。⁽¹⁰⁾ 六角定頼が細川氏綱と結んでいた遊佐長教と、細川晴元の和睦を成立させた⁽¹⁰⁾ ためである。

しかし、天文十八年一月、三好長慶は、三好政長と細川晴元に對し叛旗を翻し、細川氏綱・遊佐長教と結び出陣した。三月に近衛邸近くにあった慈照寺里坊で、近衛兄弟の長男慈照寺が何者かによって殺害された。六月、摂津江口の戦いが行われ、三好政長は討死した。三宅城にいた晴元は丹波を経て京に戻り、義晴一家・近衛一族・援軍として上洛していた六角定頼らと共に坂本に退去した。⁽¹⁰⁾ そして、天文十九年五月四日、足利義晴は四十歳で近江穴太において死去した。慶寿院三十七歳、義輝十五歳であった。慶寿院は九日に髪をおろし、宮内卿局、慶寿院の乳母も出家した。⁽¹⁰⁾

五月二十一日、慈照寺で葬儀が行われた。上野信孝・伊勢貞孝ら義晴側近衆の他、飛鳥井雅綱・烏丸光康・高倉永家・広橋国光・高倉永相・日野晴資・南御所・入江殿・宝鏡寺・通玄寺・總持寺・五山十刹の僧侶等も参じた。⁽¹⁰⁾

結婚後の生活をまとめると、平穏な日々とは言えないが、將軍に敵対する勢力があったわけではなく、四国の義維が京都まで進出することもなかった。義晴一家近江退去の原因は、細川晴元被官の内部分争、細川氏綱拳兵であり、細川家内の争いが原因であった。六角定頼は將軍擁護・

細川晴元擁護の立場であり、越前朝倉、能登畠山、若狭武田、伊予河野、伊勢北畠、越後長尾も義晴派であった。

義晴は天文十六年に細川晴元と袂を分かち、高国跡目の氏綱と結ぶ道を選択したが、六角定頼の意向で晴元と和解した。しかし、三好長慶が晴元に叛旗を翻し氏綱側と結んだために、義晴一家は近江に没落し、義晴は近江で死去するのである。そして、義晴一家の近江退去には常に近衛一族も同行しており、將軍家と近衛家は外戚という以上に一族化していったといえるだろう。

四、御台としての活動

つぎに、御台としての活動を見ていこう。

①天文八年、慶寿院から大館常興に、山城国河嶋を近衛家領として安堵する將軍下知があったが、万松軒が訴訟に及んだのは謂れないことなので、その旨を心得ておくよう指示があり、大館常興は、心得たと返答した。⁽¹⁰⁾

②天文九年三月三日、日野殿御料人が慶寿院の許に訪れ、近江高島郡日野家領の年貢半分を御料人へ分けるよう口入を願ってきた。⁽¹⁰⁾ 日野家当主は晴光（二十三歳）である。この日野家領分進は、一代限りであったので認められた。

宝鏡寺文書には、祥雲院雑掌宛て文書がある。近江高島郡仁和庄内日野家割分地を、日野家に借錢があると号して、伊藤新左衛門尉が押領したことを禁じ、所領を安堵する天文九年十二月八日付幕府奉行人奉書である。⁽¹⁰⁾ この文書から、慶寿院のところに来た日野御料人は、祥雲院（足利義尚妻、日野勝光娘）だと思われ、分割されたのは、仁和庄の一部、年十二石（閏月がある年は加増）分である。祥雲院は分割地を得たもの

の、伊藤に押領されたので幕府に訴え、幕府奉行人奉書が出されたのである。

③天文九年医師半井明英が医学を学ぶため渡唐を希望し、慶寿院に申し入れたが、義植の時代に大内義興に勘合を与えたので、大内の許可がないと難しく、大内に関わることはできないとし、内談衆も同意している。⁽¹⁶⁾ 大内とは大永三年に勘合船入港をめぐって、寧波の乱が起きているためである。

④天文九年九月二十三日、伊勢貞孝邸で、揚弓会が開かれた。この会に朝倉孝景の弟景高・内談衆本郷光泰が参加した。朝倉景高は兄孝景と不仲であり、京都に潜伏していた。義晴は景高との接触を禁じており、景高と同席した本郷光泰に切腹を申し付けたが、本郷は逐電した。⁽¹⁷⁾ 本郷光泰は、義晴の父義澄の近江没落に供奉した本郷扶泰と同一人物ではないかとされ、義澄以来の旧臣で内談衆であった。朝倉孝景からは義晴の処置に対する御礼として、禁裏修理料百貫、義晴に五十貫が進上された。その後、天文十年に慶寿院が執り成し、本郷光泰は許され幕府に復帰した。⁽¹⁸⁾

⑤天文十年八月二十一日、慶寿院は禁裏で能を催している。能役者に唐織物御服を下すタイミングや、叔父岩栖院靈超を僧ではなく徳大寺として、近衛家と同じ座敷に通すこと、慶寿院参会のタイミングなどを、十日から大館常興と打ち合わせている。⁽¹⁹⁾ 叔父の岩栖院靈超も参加していることから、近衛一族が揃って参加したと思われる。

義晴御台時代の慶寿院の活動をまとめると、身近な人物の個人的な要望の口入に限られ、政治向きの事に直接関わっていたとは言えない。本郷光泰の件は、慶寿院の執り成しという形をとることで、円満に義澄以来の旧臣の幕府復帰を実現したものである。

しかし、近衛家は大名の要望を幕府に取次ぐなど、「將軍御一家」として、その影響力を發揮し、幕府の有力者として幕政に関与した。

第三章 義輝母時代

一、義晴死後の動向

義晴死後、義輝は天文十九年五月十一日に、比叡辻宝泉寺へ移り、五月二十六日に徐服復任の宣旨があった。近衛植家は比叡辻妙泉寺が宿所で、山科言継は植家の所にも挨拶に行っている。⁽²⁰⁾

閏五月二十三日に四十九日の仏事が行われ、六月二十一日に、禁裏へ義晴の遺品が奉納された。六月二十八日に將軍参賀が行われ、七月二日御沙汰始めが行われた。⁽²¹⁾

七月八日、細川晴元軍は吉田・浄土寺・北白川に進出した。十四日、三好長逸・長虎親子、十河一存を大将に一万八千の軍が一条から五条に打ち出した。晴元軍は吉田山に陣取、江州衆は北白川山上に陣をとった。人々は晴元軍に悪口を浴びせ、京中地子等の徴収を東軍は断念した。⁽²²⁾

十月二十日禁裏の東から五条にかけて十河一存・芥川孫十郎・三好長逸らが討ち出し、東山上に陣取った江州衆二万程の内、永原衆・細川衆等二千程が鴨川河原に打ち出し小競り合いがあった。⁽²³⁾

十一月十九日、三好長慶軍が東山・聖護院・岡崎・吉田・北白川・浄土寺・鹿ヶ谷・田中を焼き払い、二十日に大津、松本に進出し放火した。そして、二十一日に「東山武家之御城」が落城した。これは、義晴が築城した中尾城・または北白川城だと思われる。義輝は城を自焼し、坂本へ逃れ、さらに堅田に移った。⁽²⁴⁾ 慶寿院・近衛一族も堅田へ移ったのである。三好軍は焼け残った場所に放火し、城を破壊し下国した。⁽²⁵⁾

翌天文二十年一月三十日、伊勢貞孝・一色七郎・進士賢光・春阿弥・松阿弥が、義輝を盗み奉じて上洛しようとしたが露見し、坂本から退散し夜中に上洛した。

二月七日、松永長頼を大将に三好軍は近江に攻め込んだが、瀬田の山岡勢に敗れ退いた。二十七日にも三好勢は大津に放火し、二十八日には逆に山岡勢が山科に放火した。この間の二月十日に義輝・慶寿院・近衛植家は朽木へ逃れた。

三月十四日に、伊勢守邸で行われた酒宴で、三好長慶が進士賢光に襲われたが、命は取り留めた。これは、義輝が命じたとも、長慶に対する進士の怨みとも言われる。義輝が命じたものであれば、一月の進士らの坂本退去は義輝も承知していたといえるだろう。

七月には、晴元勢が陣取っていた相国寺が焼かれた。今出川御所は、天文十八年に義晴が近江に没落する際、相国寺が留守居を命じられていた。この後、今出川御所は存続していたものの、後述するように荒廃が進んだ。

十月二十八日、大覚寺義俊が天王寺別当に任じられ、義輝・義俊より禁裏へ御礼があった。朽木在住中も、義輝から禁裏へ猪子や、季節の贈答が行われ、公家が朽木を訪れている。

天文二十一年一月二日、それまで細川晴元を支援してきた六角定頼が死ぬと、二十八日、三好長慶と義輝の和談が成立し、義輝は帰洛した。伊勢被官蜷川・堤を先頭に、三宝院義堯、大館晴光・大館晴忠・上野信孝・朽木植綱・細川晴経・伊勢貞孝・高倉永家等が供奉し、近衛植家・大覚寺義俊・慶寿院など数千人が入洛した。慶寿院の輿は十一丁であった。朽木にも多くの人数が供奉していたとみられる。

晴元は嫡子聡明丸を三好側に差し出し、自身は出奔した。翌日義輝に

参賀が許された者は、朽木に挨拶に来た者だけだった。山科言継は朽木へ行っていないが、所領が不知行で事行かなかったと弁明し、参賀が許されている。西園寺公朝・三条公兄・雅業王・勤修寺晴秀・三条実福・狩野元信と孫（永徳）等が参賀に訪れた。

入洛した義輝は他所に入った記録がないので今出川御所に入ったと思われ、今出川御所は存続していたが、二月に義輝は御所を新造し、庭泉水を作っており、荒廃していたものと思われる。入洛の翌日二十九日に山科言継は、近衛植家の所にも挨拶に行き、三月に義輝が近衛邸に御成しているの、近衛邸も存続していた。聖護院は長慶によって焼かれたが、道増は八月に醍醐寺に入寺し、能見物をしている。

三月十一日、細川氏綱が右京大夫、弟藤賢が右馬頭に任じられ、幕府に出仕した。

十一月、東山靈山に義輝は城を構え、再び京都に進軍してきた晴元に對抗した。二十七日晴元軍は、西岡から嵯峨に陣とり、さらに義輝の籠る靈山に取り懸かり、五条坂に放火し建仁寺が焼けた。晴元軍が引き上げた後、山科言継・冷泉為益・広橋国光・庭田重保・摂津元造・飯尾堯連・飯尾貞広等は靈山城の義輝、清水寺に慶寿院・近衛植家を訪ねている。三十日にも、言継・万里小路惟房・勤修寺晴秀・三条実福・甘露寺経元が靈山に義輝、清水に慶寿院・近衛植家・子安観音に朽木植綱を訪ねた。

十二月一日三好長慶が上洛し、祇園に陣取った。義輝は引き続き靈山に、伊勢貞孝は清水寺執行所にいたが、十二月十七日に植家・聖護院・近衛晴嗣（前久）が連歌会を行っていることから、この頃までに帰館したと思われる。

翌天文二十二年正月は、義輝・慶寿院は今出川御所で、参賀を受けた。

閏正月二十八日、三好長慶も子息孫二郎と共に上洛し、御供衆として義輝に出仕した。しかし、長慶と、義輝側近に不和があり、上野信孝・杉原晴盛・細川晴広・彦部晴直などが晴元に内通しているという雑説があり、長慶は淀に下った。⁽¹⁶⁾

二月八日、義輝は東山靈山城を普請し、十二日、三好長慶が東寺まで上洛した。二十三日に義輝は再び靈山城に入っている。細川晴元は高雄に陣取り三好長慶側と戦があった。長慶は清水願所で義輝と対面し、反長慶派の上野信孝から人質を取った。⁽¹⁷⁾ 義輝家臣は長慶派と晴元派に分裂していた。⁽¹⁸⁾ 三月八日、三好長慶と義輝の和談が破れ、義輝が靈山城に入城した。それまでは、今出川御所と併用していたのではないかとされる。⁽¹⁹⁾ 慶寿院・近衛植家も清水寺に入ったものと思われる。

先述したように、四月八日、久我晴通が「世上之儀」について慶寿院に意見したが聞き入れられず、朝廷の許可も得ないまま落髪した。⁽²⁰⁾ 晴通は晴元と通じることに反対したが、聞き入れられなかったのではないだろうか。もしそうであれば、晴元と結ぶ道を選んだのは十八歳の義輝ではなく、慶寿院であったということになる。

晴元と近衛植家は、度々遊興の場に同席しており親しかった。晴元とのつながりを持つ植家は、晴元と連携する道を選び、慶寿院もそれに同意したのではないだろうか。

七月、細川晴元が長坂に進出し、義輝も出陣した。晴元は上野信孝らを迎えられ北野の馬場で義輝に許された。義輝は西院小泉城を攻め、船岡山に陣取った。しかし、その間に、松田監物・醍醐寺衆が守る靈山城が三好被官今村慶満に攻められ落城した。義輝は杉坂から龍花、朽木に撤退し、途中随行していた公家・奉行人の多くが京都に戻った。⁽²¹⁾

西島太郎氏によれば、天文二十二〜永禄元年（一五五八）に朽木に滞

在していたことが確認できる人物は、近衛植家・清光院・宮内卿局・春日局・細川晴元・細川藤孝・大館晴光・曾我上野介・飯川信堅・三淵晴員・諏訪晴長・飯尾貞広・飯尾堯連・松田藤弘・松田藤頼・松田頼隆・治部貞兼・治部藤通・祐阿である。⁽²²⁾ 義輝御供の人数は四十人余りであったとされるので、実際にはさらに多くの者がいたと思われる。その多くが、義澄・義晴の代から將軍近臣の者たちであった。

松田頼隆は、大原で他の奉行人とともに拘束されたが、逃れて龍花に戻っている。その後、朽木いる頼隆に山科言継が書状を送っているので、朽木に行ったことが判明する。同じく捕えられた奉行人中沢光俊は、帰京後、頼隆宅が闕所となったので、頼隆宅に居住し、三好側の奉行人として活動した。⁽²³⁾ なお、近衛植家が朽木いることから、慶寿院も朽木にいたものと思われる。慶寿院は靈山城から坂本、朽木へ逃れ、義輝と合流したと考えられる。なお、その間も近衛晴嗣（前久）は在京していたことが確認できる。⁽²⁴⁾

天文二十三年正月、近衛邸歌会に大覚寺義俊・聖護院御児が参加し、正月二十九日の禁裏和漢歌会に大覚寺義俊・近衛晴嗣が、三月の禁裏千句に義俊が参加している。⁽²⁵⁾ このように、大覚寺義俊も在京していたことが判明する。

弘治二年（一五五六）九月十一日、山科言継は、駿河へ向かう旅の途中、上坂本の妙観寺で、近衛植家・妻慶子に面会している。⁽²⁶⁾ 植家・慶子はこの頃坂本に在住していた。慶寿院には会っていないので、慶寿院は朽木にいたものと思われる。

永禄元年（一五五八）三月、義輝は龍花へ移り、五月坂本に移り、細川晴元と共に如意ガ嶽に陣を構え、三好軍と戦闘が行われた。六月七日、勝軍城に陣取っていた伊勢貞孝・三好軍は城を自焼し東寺へ引き、十二

日義輝は勝軍山に御殿を建てた。⁽¹⁸⁾ 九月十六日吉田兼右が義輝・慶寿院・植家等の御被いを勝軍城に届けていることから、慶寿院も勝軍城にいたものと思われる。⁽¹⁹⁾

その後、三好側と和睦が成立し、十一月二十七日義輝は入洛し、御殿で細川氏綱・細川藤賢・三好長慶・伊勢貞孝より太刀・馬の進上を受けた。御供は大館晴光・晴忠・上野信孝等であった。禁裏へも義輝から太刀・馬・折二十合樽二十荷が贈られた。⁽²⁰⁾

入洛に際し義輝が長慶等の参賀を受けた「松の御庭のある御殿」は、今出川御所であると思われる。永禄元年山科言継が武家御所御殿を見物しているのが、今出川御所は存続していたことが確認できる。⁽²¹⁾ この日は相国寺に逗留し翌日勝軍城に帰り、十二月三日、義輝・慶寿院は本覚寺（妙覚寺）に入った。⁽²²⁾ 慶寿院へも人々が御礼に参上したが対面はなかった。そして、細川藤賢に薄地の素襖が御免となり、これは、近衛植家の申沙汰だった。

十二月十七日、細川氏綱より樽・白鳥・昆布等が進上され、長慶より慶寿院に折五合樽五荷が進上された。⁽²³⁾ 十二月二十三日には、義輝と近衛植家の娘の祝言が三日間に渡り行われた。⁽²⁴⁾

永禄二年二月三日、三好長慶と共に息孫次郎（義興）が初めての御礼に出仕し、義輝に馬・太刀・五種五荷、慶寿院に五種五荷、春日局へ三種三荷が進上された。三月十日に、細川氏綱が歳暮の挨拶として、義輝に扇十本・十合十荷、御台に五合五荷、慶寿院に五合五荷と初めての対面の御礼に練貫一重・引合十帖、春日局へ三種三荷が進上された。

同十二月十八日三好孫次郎へ、「義」の偏諱が与えられ、義長となった。永禄三年正月、長慶が相伴衆として始めて出仕し、義輝に太刀・万疋が長慶・義長それぞれから進上され、慶寿院にも長慶・義長から各千疋が

進上された。その他の儀礼においても、慶寿院・春日局には必ず進上物が記録されている。⁽²⁵⁾

永禄二年七月八日、武衛の敷地に将軍邸が新造され、造作始めが行われ、永禄三年六月、武衛御所に移徙した。⁽²⁶⁾ この御所は堀が掘られ、城に近いものであった。⁽²⁷⁾

同年八月一日、八朔の礼に山科言継父子・広橋国光・高倉永相・甲州武田入道等が参賀に訪れている。言継は、御台近衛氏、慶寿院へも挨拶に行き、聖護院道増と初めて対面した。⁽²⁸⁾ これ以前の同年二月一日に織田信長、四月頃に長尾景虎も上洛している。⁽²⁹⁾ また、正親町天皇即位費用を毛利元就が献上した。⁽³⁰⁾ 三好長慶も即位費用百貫を献上している。⁽³¹⁾ 義輝京都復帰後、信長・謙信が上洛し、義輝御所では、近衛家主催の風流が行われ、正親町天皇即位費用も献上され、漸く京都は安定を取り戻した。

永禄三年二月、正親町天皇は、勸修寺尹豊の即位奉奏就任について義輝に直に文を送り、大覚寺義俊が取り次ぎ、翌日義輝から承認の返事があった。⁽³²⁾ 義俊から慶寿院、義輝へ伝達されたのである。近衛ルートの交渉は迅速な交渉ルートとして、禁裏も利用したのである。

永禄四年三月三十日、義輝は三好義興邸へ御成した。これ以前の二月二十三日、鹿苑寺に義長（義興）が見物に行ったところ、義輝が坂迎に來ているので参上するよう呼ばれた。その後、坂迎への返礼として将軍邸で能を催したが、三月一日の義長幕府出仕の時、大館晴光・上野信孝・伊勢貞孝が、返礼は略儀であったので再度御成を申し入れるよう持ちかけた。そこで、三好長慶・義長は、光照院の並びの立売北・道正際・木下にあった古御殿に主殿の破風、能舞台・便所、御湯殿・厩を新造し、茶室、座敷飾りを設え、西向きに冠木門を建て義輝を迎えた。⁽³³⁾

義輝は、細川藤賢・大館輝氏・上野信孝・細川輝経・大館晴忠・伊勢

貞良・伊勢貞倍・伊勢貞孝・万阿を御供衆に連れ御成し、三好長慶・義長・細川氏綱・三好長逸・三好政康等が出迎えた。また、竹内季治、松永久秀は御供衆の接待にあたった。なお、上杉本洛中洛外図に描かれた三好筑前邸冠木門は、この御成のため新たに造立された冠木門を描いている。⁽¹⁷⁾

三好邸御成は、三好義長（義興）を義輝の臣下として、幕府秩序に位置付け、主従関係を再確認することが目的であった。⁽¹⁸⁾ 義晴の遺言であった「將軍家再興⁽¹⁹⁾」を象徴する出来事として、上杉本に三好邸冠木門が描かれたのである。

永禄四年四月、幼少な和泉守護代松浦萬満（一存実子）を後見していた三好長慶の弟十河一存が死去した。すると、近江六角義賢と畠山高政が結び、六角は法華宗を払うと号して入京をめざし、守山まで進出した。三好は大館輝氏女を人質として取り、義輝の離反を防ぎ、永禄四年五月細川晴元と和睦し、晴元は摂津富田普門寺に入った。⁽²⁰⁾ 晴元の離反を防ぐためである。六角義賢は勝軍山に陣をとったが、將軍義輝に対しては敵対するものではなかった。⁽²¹⁾

永禄五年三月五日、久米田の戦いで長慶の次弟三好実休が戦死すると、翌日義輝・慶寿院は三好側と一味となり石清水八幡に退いた。三好義興も山崎まで退き、六角義賢（承禎）軍が清水坂に陣を移し禁裏を警固し、洛中洛外に放火した。⁽²²⁾

五月、阿波から三好の援軍が到着し、教興寺の戦いで畠山・根来寺軍を破った。⁽²³⁾ 六月、六角は三好と和睦し近江に帰陣し、六月二十二日、義輝・慶寿院は帰洛した。その後八月二十五日、伊勢貞孝は、義輝・三好に叛旗を翻し、九月十一日に滅ぼされた。⁽²⁴⁾

また、八幡避難中の四月十一日、義輝に嫡子が誕生したが、七月十三

日死去した。⁽²⁵⁾ なお、八月二日、越後へ下向していた近衛晴嗣が帰京している。⁽²⁶⁾

永禄五年は、三好が畠山高政・六角義賢に挟撃され、三好実休が戦死するなど三好政権の危機であった。義輝は三好と組むことを選び、一方、八幡へ同行せず在京を続けた伊勢は滅ぼされた。⁽²⁷⁾ しかし、永禄六年に義輝息女總持寺（八歳）が松永の所へ人質として送られ、將軍邸の周りに大堀を掘るなど、三好側と義輝の間は信頼関係にあったとは言えない。

翌永禄六年、三月細川晴元が富田で死去、四月上野信孝が死去、十一月三好義興が死去、十二月細川氏綱死去、翌永禄七年五月三好長慶の弟安宅冬康が長慶に殺害され、七月長慶も死去した。永禄四年から七年の三年ほどの間に、義晴の京都没落に関係した人物が次々と死去し、三好政権は若い三好義継（十河一存息）が継いだ。別稿で論じたように、この頃永禄九年五月の義晴十七回忌のため、上杉本が発注されたと推定できる。⁽²⁸⁾

永禄八年五月十九日、武衛御所が突然三好義継・松永久通（久秀息）三好三人衆に襲われた。義輝は長刀で応戦したという。義輝が部屋から出ようとしたとき、慶寿院は義輝を抱き力を尽くし出て行くのを止めようとしたが、それを振り切って走り出たという。慶寿院は義輝の死を目のあたりにし、これ以上生きながらえようとは思えないと自害しようとしたが殺されたとフロイスは記す。⁽²⁹⁾ 梅仙軒靈超は、「公方様御勸様無及樊噲⁽³⁰⁾申候、慶寿院殿も御自害無比類事」と書状に認めた。⁽³¹⁾ 義輝弟の鹿苑院周昌も三好被官平田に誘い出され路次で殺され、大館晴忠の子岩福、進士晴舎、彦部雅楽頭をはじめ多くの者が死んだ。慶寿院の内衆、小林左京亮、西面左馬允、松井新二郎、高木右近、森田新左衛門尉、竹阿、金阿も殺された。⁽³²⁾

義輝側室であった進士晴舎娘小侍従は、久我の家臣竹村のところに匿われたが、知恩院で二十四日に殺され、義輝御台近衛植家娘は、三好長逸が近衛家に送り届けた。

この永祿の政変の原因を、山科言継は阿波の義栄を將軍にするためとし、靈超は、義栄入洛を調えるためだろうかとし、フロイスは義栄に將軍の名跡だけ継がせ松永久秀が実権を握るつもりだったとする。天野氏は、三好氏単独の畿内支配を狙っていたとする。

天文十八年から永祿元年まで、途中天文二十一・二十二年を除き、將軍不在は長期にわたり、その間に將軍を必要としない三好体制ができていた。また、三好氏領国支配はかつての「幕府―守護体制」によって維持されたのではなく、三好氏の自力によるものだった。そして、永祿元年に義輝と和解後は、三好氏は將軍家のために多大な出費と儀礼への出仕を負担していた。それでもなお、將軍を敵に回すことは敵対勢力を抱えることで不利であった。また、三好長慶にとって敵だったのは細川晴元であり、本来、將軍家に敵対するものではなかった。しかし、若い義継にとって長慶亡きあとの三好家を維持するために、義輝は脅威だったのであろう。

なお、慶寿院の法名は「明室慈昌大姉」である。翌永祿九年に近衛植家が死去し、永祿十年に大覚寺義俊が敦賀で死去した。道増は安芸に逗留し同地で元龜二年に没した。晴通は義昭の許で大名間和平の使者や側近を務めたが、「足利―近衛体制」は慶寿院の死と共に終わったのである。

二、將軍母としての活動

將軍母の時代の慶寿院の活動を見ていこう。

①「禁裏御料所内藏寮領陸路河上四方八口率分役所」が三好被官今村慶

満に押領された件について、山科言継は三好方と天文十八年から交渉していたが進展が見られず、義輝上洛後は、幕府奉行人奉書も手に入れるが不調であった。そこで、天文二十一年八月慶寿院の御書を出して貰いたいと義輝乳人に訴え、十二月に御内書が出た。今村の押領は天文二十三年になっても解決しなかったが、慶寿院が幕府内の実力者であったため、慶寿院へ依頼したものと思われる。

②山科言継は、天文二十一年九月に、山科の知行分を回復するため、内々慶寿院・近衛植家・義輝乳人へ書状を送り、地頭分が返付されれば、西山郷の年貢・地子の内三分の一、野村郷の半分の地子を十年間進納すると約している。言継は、永祿八年にも返還を願っていることから、この願いは叶わなかったと思われるが、近衛・慶寿院を通じて願い出ることが公家にとっては最も成功率が高い方法だったのであろう。

③永祿三年、浄土真宗高田派総本山専修寺真恵の子応真（後に堯慧）は、当初住持職継承を辞退したので、常盤井宮の子真智が後継者となる予定であったが、真恵の死後、応真は住持職の論旨を得て末寺に参集を呼びかけた。一方、真智も論旨を得て、朝廷・幕府・大名を巻き込んだ争いとなった。越前では勝曼寺など四カ寺が応真支配に抵抗し、相論は、朝倉が裁許することになったが、朝倉義景は幕府の意向に沿った下知を行うことになり、両派が幕府での訴訟工作を行った。

真智派は大館晴光を介して、万正の礼銭により義輝の御内書を得たが、慶寿院と大覚寺義俊が義晴猶子であった応真のため口入をし、先の御内書は破棄され、応真への帰順を命じる幕府奉行人奉書が出された。「専修寺文書」には、義輝から慶寿院宛て消息、慶寿院から専修寺宛て消息、慶寿院から朝倉室への消息案が残され、慶寿院が主導権を持ってこの相論に関わったことが判明する。

④永禄五年、曼殊院と北野社松梅院の加賀富墓庄をめぐる相論において、伊勢貞孝が行う政所沙汰で裁許されたが、この裁許に対し松梅院は裁許が曼殊院側に偏っていると愁訴した。義輝は審理経過を奉行人に尋ねようとしたが、松永久秀は政所でひとたび出た判決に將軍が口を挟むことはするべきではないと伊勢貞孝を擁護した。激怒した義輝は、久秀の良きようにせよと声を荒げ、上野信孝・進士晴舎らは久秀の遠慮のない申し様を諫めた。

その後、久秀は奉行人の喚問に同意したが、義輝の八幡動座により、喚問は延期となった。そして、その間奉行人が奉行人奉書に加判することを慶寿院が差しとめた。五月九日、加判しなかった奉行人松田藤弘は伊勢貞辰の糾明に対し、その間の事情を説明した書状と慶寿院の文の写しを提出した。⁽²⁰⁾

⑤永禄六年、慶寿院は興福寺一乗院に入室していた次男覚慶(後の義昭)を、前例があるとして、二衣を許すよう正親町天皇に執奏した。天皇は、前例を具体的に示すよう返答している。翌月、一乗院覚慶より樽十荷五色が進上されているので、この願いは認められたと思われる。⁽²¹⁾

このように、慶寿院は大きな力を持っており、時には義輝の裁許を覆すこともあった。義晴が死去した時義輝は十五歳であり、義晴は慶寿院に「我無成又共思沈ミ給ハデ、世ノ中ノ後見トモ成給ヒ、再ヒ家ヲオコシ給ヘ」と遺言した。⁽²²⁾慶寿院は義輝後見役だった。そして、慶寿院には近衛一族が従っていたことが、慶寿院が大きな力を持っていた要因であろう。

例えば、毛利元就が息子吉川元春に出した書状には、聖護院道増を「公方様叔父にて御座候、其上悉皆之御異見者にて御座候」と述べている。これは道増が義輝上使として、毛利一尼子間調停に下向してくることに

ついて、元春に道増の接待について注意を与えたもので、永禄三年の文書とされる。⁽²³⁾道増が義輝に対し大きな発言力を持っていたことがわかる。これは、慶寿院がいればこそその発言力であり、近衛植家・大覚寺義俊も同様の発言力を持っていたと思われる。

三、遊覧とフロイス

永禄七年五月、慶寿院は伊勢神宮に参詣している。鹿苑寺(周高カ)・武田義統に嫁いだ娘・小侍従も同行した。⁽²⁴⁾二見ヶ浦見物のため、伊勢河崎から舟で、太江寺へ行き立石(夫婦岩)を見物した。御供は、細川藤孝・上野清信・大館晴忠以下数十人であった。伊勢神宮が船等を差配し、義輝から感状があった。⁽²⁵⁾

永禄八年三月十三日は、鞍馬に参詣している。二泊三日の参籠で、義輝も翌日合流している。御供は、大館晴忠・上野憲忠であった。⁽²⁶⁾永禄七年に義輝は有馬に行っており、⁽²⁷⁾永禄七八年は戦乱もなく、遠出ができた状況だった。

さて、永禄八年にルイス・フロイスは、慶寿院に面会している。將軍邸を訪れたフロイスはまず、進士美作守晴舎の所へ行った。進士晴舎は、義輝側室小侍従の父で取次を勤めていた。將軍邸は深い堀で囲まれ、御殿の外には夥しい馬と輿が並んでいた。義輝・御台に挨拶した後、進士主馬允と共に慶寿院の御殿に赴いた。途中四・五部屋の前を通り、慶寿院の座敷についた。そこには多数の女性がいた。盃が運ばれ、慶寿院が飲んだ後、その盃を侍女がフロイスらの所へ運び、慶寿院は手ずから箸をとって肴を与えた。そして、異国の人達には日本の礼式はさぞかし新奇で不馴れに相違ないのに、彼らがそれらの礼式に通じているのは驚くべきことだと言った。側には、阿弥陀の祭壇があり、金の後光が差し、

頭に飾りがついていた。慶寿院は大柄な体格の人で、年老いて威厳があった。⁽²⁹⁾現在、義晴・義輝・義昭の肖像画が伝わっているが、義輝・義昭は大柄な母親に似ていたと思われる。

おわりに

慶寿院は、近衛尚通一家という結束の固い家の末娘として生まれ、近衛家領維持の切り札として將軍義晴に嫁いだ。近衛植家等兄弟が慶寿院に常に寄り添ったのは、父尚通の指示だったのではないかと思われる。

そして、慶寿院が天文三年（一五三四）に十二代將軍義晴に嫁いだ当時、義晴は近江桑実寺で六角定頼庇護下にあった。慶寿院は完成間もない「桑実寺縁起絵巻」を京都で見っていた可能性が高い。「桑実寺縁起絵巻」は、桑の大樹のもとに、日光・月光菩薩の垂迹である金の鳥（太陽）と白兔（月）が揃うところからはじまり、藤原氏ゆかりの桑実寺に、高貴な女性が行くという話である。巻頭場面は、桑実寺の大樹（將軍）のもとに、太陽（義晴）と月（慶寿院）が揃うことを暗示しているのである。

義晴・義輝期は、度々將軍が京都から近江に避難しており、結婚後の慶寿院も避難を繰り返し苦楽を共にした。それ以前の將軍家に比べ、日常的に夫婦が接する機会も多く、危機を乗り越えるため家族としての結束が強まったと思われる。そして、慶寿院は常に義輝を手元に置き、手塩にかけて育てた。天文五年、伊勢邸に義輝と共に義晴・慶寿院が移り、天文八年に八瀬へ義輝・慶寿院のみが避難したことは、慶寿院の意思ではないかと思われる。義輝と慶寿院は生涯離れて暮らすことはなかった。

また、近衛一族も義晴の京都退去に随行し近江に滞在した。また、將

軍側近として大名間調停の使者に立ち地方へも下向した。血縁者を持たない義晴にとって、義澄以来の家臣と合わせ、近衛一族は最も信頼できる存在だったのである。そして、近衛家も義晴を近衛一族の一員と認識していたのであろう。近衛家と義晴夫妻は、外戚という以上に一族であった。

義輝期の慶寿院は、將軍後見役として大きな力を持っていた。伊勢貞助の記録や、『お湯殿の上の日記』に度々慶寿院に関する記載が見られる。義輝にとって母及び近衛家の伯父達の意見は無視できないものがあつた。慶寿院は近衛兄弟をバックに「將軍家家長」だったといえるだろう。

義晴・義輝期の「足利―近衛体制」という特異な体制は、慶寿院がその要だったのである。近衛家が外戚として義晴・義輝期に力をふるったという理解がこれまでの通説だが、慶寿院を支えることが近衛兄弟の使命だったのである。

「足利―近衛体制」は、近衛尚通家という家族の結束が非常に強い一家と、血縁者を持たない足利義晴が結び付き、その要として慶寿院がいたことよって生まれた特異な政治体制だったのである。

慶寿院死後上杉本が完成し、慶寿院は上杉本を見ることができなかつた。元龜四年（天正元年、一五七三）に、上京は織田信長によって焼き討ちされ、その姿を大きく変えた。上杉本は幕府の支配地域である京都の最後の姿を今に伝える。そして、室町幕府滅亡と共に、京都は將軍の都としての役目を終えたのである。黄金に輝く『上杉本洛中洛外図屏風』は、何度も京都退去を余儀なくされた將軍家の洛中洛外への思いと、天下静謐の祈りが込められているのである。

注

- (1) 拙稿「上杉本洛中洛外図屏風に描かれた將軍の行列」(『ヒストリア』二五七、二〇一六年)。同「上杉本洛中洛外図屏風の主題と制作目的」(『史艸』五七、二〇一六年)。
- (2) 「年代記抄節」国立公文書館蔵写本。
- (3) 『言繼卿記』永祿八年五月十九日条。
- (4) 黒嶋敏「山伏と將軍と戦国大名」(『年報中世史研究』二九、二〇〇四年)。
- (5) 高梨真行「將軍足利義輝の側近衆」(『立正史学』八四、一九九八年)。川嶋将生「大覚寺義俊の活動」(『室町文化論考』法政大学出版局、二〇〇八年) 初出一九九五年。
- (6) 同前、高梨論文。
- (7) 前掲注(4) 黒嶋論文。
- (8) 高群逸枝「平安鎌倉室町家族の研究」(国書刊行会、一九八五年)。
- (9) 湯川敏治「中世公家家族の側面」(『ヒストリア』九一、一九八一年)。同「戦国期公家女性の生活」(『ヒストリア』一三九、一九九三年)。同「足利義晴期の近衛家の動向」(『日本歴史』六〇四、一九九八年)。(『戦国期公家社会と荘園経済』続群書類従完成会、二〇〇五年に再録)。
- (10) 柴田真一「近衛尚通とその家族」(『戦国期公家社会の諸様相』和泉書院一九九二年)。
- (11) 前掲注(5) 高梨論文。同「戦国期室町將軍と門跡」(五味文彦・菊池大樹編「中世の寺院と都市・権力」山川出版社、二〇〇七年)。
- (12) 前掲注(4) 黒嶋論文(『中世の権力と列島』二〇一二年に再録)。
- (13) 水野智之「足利義晴と義昭期における摂関家・本願寺と將軍・大名」(『織豊期研究』十二、二〇一〇)。
- (14) 木村真美子「大覚寺義俊の活動と近衛家」(『室町時代研究』三、二〇一一年)。
- (15) 金子拓「織田信長権力論」吉川弘文館、二〇一五年。
- (16) 磯川いづみ「天文期伊予河野氏の対京都外交」(『戦国史研究』六七、二〇一四年)。
- (17) 羽田聡「室町幕府女房の基礎的考察―足利義晴期を中心として―」(『京都国立博物館学叢』二六、二〇〇四年)。
- (18) 設楽薫「將軍足利義晴の嗣立と大館常興の登場―常興と清光院(佐子局)の関係をめぐって―」(『日本歴史』六三一、二〇〇〇年)。
- (19) 平山敏治郎「春日局考」(『民俗学研究所紀要』二二、一九九八年)。
- (20) 菅原正子「中世公家の経済と文化」吉川弘文館、一九九八年。
- (21) 前掲注(9) 湯川論文、「戦国期公家女性の生活」。
- (22) 前掲注(9) 湯川論文、「戦国期公家女性の生活」。
- (23) 前掲注(9) 湯川論文「戦国期公家女性の生活」。同「中世公家家族の側面」文龜元年生まれの女子と宝鏡寺を同一人物の可能性有としながらも、別に数えたので十一人とした。
- (24) 前掲注(10) 柴田論文。
- (25) 「雑々記」東京大学史料編纂所架蔵陽明文庫写真帳。
- (26) 「後法成寺関白記」永正十年十二月二十一日条。
- (27) 前掲注(9) 湯川論文、「戦国期公家女性の生活」。
- (28) 「しをぎをけずり、鐙をわり」滋賀県立安土城考古博物館、二〇一三年特別展図録、五十頁。「東南寺文書」(『大日本史料』十編一冊一二頁)。
- (29) 亀井若菜「表象としての美術、言説としての美術史」ブリュッケ、二〇〇三年。
- (30) 『実隆公記』享祿五年正月二十一日条。
- (31) 「二水記」享祿四年八月二十二日条、享祿五年正月二十二・二十三・二十四日(二十七日条に補書)条。
- (32) 『言繼卿記』天文元年六月二十二日条。
- (33) 「二水記」天文元年十月二十日条。
- (34) 「御内書引付」(『後鑑』天文二年二月三十日条)。
- (35) 『大館常興日記』三、紙背文書、一一七頁(天文九年三月十四・十六日条関連文書)。
- (36) 『後法成寺関白記』享祿二年七月十二日条。
- (37) 同書、享祿元年二月十三日、三月六日、五月一・三十日、六月八・二十三、八月二十八日、十一月四日、享祿二年正月二十三日、六月二十六日、十月九日、享祿三年正月二十日、九月二十六日、享祿四年五月十日、天文元年正月二十五日条。

- (38) 同書、天文元年八月九日条。
- (39) 同書、天文二年正月二十三日条。
- (40) 同書、天文二年九月十七日条。
- (41) 同書、天文二年十一月二十三日条。
- (42) 『実隆公記』永正三年十二月二十二日条。
- (43) 鳥谷弘幸『古筆学拾穗抄』木耳社、一九九七年、三七七～三九二頁。
- (44) 同書、四一六～四一九頁。
- (45) 前掲注(29) 亀井著書、一四五頁。
- (46) 吉田友之『桑実寺縁起絵』の制作』(『続日本絵巻大成』十三) 中央公論社、一九八二年。
- (47) 『後法成寺閔白記』享祿元年五月十四・二十四日条。
- (48) 同書、享祿二年十月二十一日条。
- (49) 同書、享祿四年六月十五・十七日条。
- (50) 同書、享祿三年十月二十九日、十一月三十日条。
- (51) 同書、享祿四年十一月二十六日条。天文二年正月二十九日条。
- (52) 同書、享祿三年二月十六日、享祿四年三月二十八日、七月五日、九月十三日、天文元年四月二十六日、十二月二十一日条。
- (53) 前掲注(10) 柴田論文。
- (54) 『後法成寺閔白記』享祿四年十二月十三・十四日条。
- (55) 同書、天文二年三月二十二日、三月二十三日、四月十四日、天文五年二月二十七日、二月二十八日、十月八日条。
- (56) 同書、天文五年二月二十四日条。
- (57) 『二水記』享祿元年閏九月二十二日条。
- (58) 二木謙一『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館、一九八五年、四〇七頁。西島太郎『足利義晴期の政治構造』(『日本史研究』四五三、二〇〇〇年)。
- (59) 前掲注(9) 湯川著書、一一一～一三六頁、卷末第一表。
- (60) 前掲注(14) 木村論文。
- (61) 『お湯殿の上の日記』天文三年六月八日条。
- (62) 『江州於桑実御台むかへに御祝目六』国立公文書館蔵写本。
- (63) 『嚴助往年記』天文三年六月二十九日条(史籍集覽)。
- (64) 『お湯殿の上の日記』天文三年九月三日条。
- (65) 設楽薫『足利義晴期における内談衆の人的構成に関する考察』(『遙かなる中世』一九、二〇〇一年)。
- (66) 『後法成寺閔白記』天文五年九月三・四・十六日、十月十八日条。
- (67) 『大館常興日記』天文八年十二月四・五日、天文九年四月十二日条。
- (68) 前掲注(16) 磯川論文。
- (69) 『後法成寺閔白記』天文五年十月二十七日条。
- (70) 『天文十七年細川亭御成記』(『続群書類従』三五輯、拾遺部)。馬部隆弘「細川晴元の取次と内衆の対立構造」(『ヒストリア』二五八、二〇一六年) によれば、従来この史料は天文七年とされてきたが、天文十七年に比定される。
- (71) 滝澤逸也「室町、戦国期の武家昵近公家衆」(『國史學』一六二、一九九七年)。
- (72) 『大館常興日記』天文九年七月十四・十五・十六日条。
- (73) 『後法成寺閔白記』天文五年正月二十七日条。
- (74) 同書、天文五年三月九・十・十六・十九・二十八・三十日、四月二・九・十三日条。
- (75) 『産所日記』東京大学史料編纂所架蔵謄写本。
- (76) 『後法成寺閔白記』天文五年四月六日条。
- (77) 前掲注(19) 平山論文。
- (78) 『後法成寺閔白記』天文五年三月二十一日条。
- (79) 同書、天文五年三月十六日条。
- (80) 同書、天文五年閏十月十九・十一月一日条。
- (81) 前掲注(8) 高群著書、九八六～九八九頁。
- (82) 「長興宿禰記」文明八年十一月二十二日条(史籍集覽)。
- (83) 『後法成寺閔白記』天文五年十二月十七日条。山田康弘氏は、將軍は洛中に住むのが相応しいという認識があったとする(二〇一五年六月六日、第三十回平安京、京都研究会口頭発表)。
- (84) 『蔭涼軒日録』寛正六年十二月二十日条。
- (85) 『産所日記』東京大学史料編纂所架蔵謄写本。
- (86) 『後鑑』天文十七年正月二十四日条。「仏国寺文書」五、武田氏系図(小浜市史)

- 社寺文書編)。
- (87) 『鹿苑日録』 天文十八年三月八日条。『言繼卿記』 永祿十二年三月二十七日条。前掲注(17) 羽田論文。
- (88) 『鹿苑日録』 天文八年正月～六月条表紙。
- (89) 『言繼卿記』 天文二十二年四月九日条。
- (90) 前掲注(15) 金子著書、五一～五二頁。
- (91) 『敵助往年記』 天文五年九月二十四日条。
- (92) 『鹿苑日録』 天文五年九月二十七日条。
- (93) 『敵助往年記』 天文六年四月十九日条。
- (94) 『大館常興日記』 天文八年閏六月一日条。『親俊日記』 天文八年二月三日条。
- (95) 前掲注(83) 山田口頭発表。『大館常興日記』 天文八年十二月四日、天文九年四月二十八日条。
- (96) 天野忠幸 『三好長慶』 ミネルヴァ書房、二〇一四年、二九頁。
- (97) 『大館常興日記』 天文十年十月・五・六・十三日条。
- (98) 『惟房公記』 天文十年十月二十九・三十日条、天文十一年三月二十八日条(『続々群書類従』五 記録部)。
- (99) 『惟房公記』 天文十一年三月十八・二十八日条。『大館常興日記』 天文十一年三月二十四・二十六・二十八日、閏三月十一・二十五・二十六日、四月三・八日条。
- (100) 『光源院殿御元服記』(『群書類従』二二、武家部)。「後奈良天皇宸記」(『続史料大成』 天文十五年十一月十八・十九日条。木下昌規「戦国期足利將軍家の任官と天皇」(『日本歴史』七九三、二〇一四年)。
- (101) 『敵助往年記』 天文十六年正月条。
- (102) 『公卿補任』 天文十六年条。
- (103) 馬部隆弘「細川国慶の上洛戦と京都支配」(『日本史研究』六二三、二〇一四年)。
- (104) 『公卿補任』 天文十六年条。
- (105) 『敵助往年記』 天文十六年閏七月条。
- (106) 『石山本願寺日記』 天文十六年十一月三日条。
- (107) 『公卿補任』 天文十六・十七年条。
- (108) 前掲注(96) 天野著書、五一頁。
- (109) 『敵助往年記』 天文十八年三月条。
- (110) 『公卿補任』 天文十八年条。「敵助往年記」 天文十八年四～七月条。
- (111) 『万松院殿穴太記』(『群書類従』二十九輯、雑部)。
- (112) 『言繼卿記』 天文十九年五月二十一日条。『穴太記』 茨城県立歴史館蔵酒泉家本。
- (113) 『大館常興日記』 天文八年六月二十三日条。
- (114) 『大館常興日記』 天文九年三月三日条。
- (115) 『宝鏡寺文書』 六(東京大学史料編纂所架蔵影写本)、八一～八二丁。『室町幕府文書集成奉行奉書篇』 思文閣出版、三四六一号。
- (116) 『大館常興日記』 天文九年三月九日条。
- (117) 『大館常興日記』 天文九年九月二十三日条。
- (118) 前掲注(65) 設楽論文。
- (119) 『大館常興日記』 天文十年八月二十一・二十二日条。
- (120) 『大館常興日記』 天文十年八月十二・二十一・二十二日条。
- (121) 『穴太記』 酒泉家本。
- (122) 『言繼卿記』 天文十九年五月二十六日条。
- (123) 『穴太記』 酒泉家本。
- (124) 『言繼卿記』 天文十九年七月八・十四日条。
- (125) 『言繼卿記』 天文十九年十月二十日条。
- (126) 『言繼卿記』 天文十九年十一月十九・二十一日条。
- (127) 『言繼卿記』 天文十九年十一月二十一・二十三・二十四日条。「公卿補任」 天文十九年条。「敵助往年記」 天文十九年十一月条。
- (128) 『言繼卿記』 天文二十年二月一日条。「敵助往年記」 天文二十年二月条。
- (129) 『敵助往年記』 天文二十年二月条。
- (130) 『後鑑』 天文二十年二月十日条。
- (131) 『言繼卿記』 天文二十年三月十四・十五日条。「敵助往年記」 天文二十年三月十四日条。
- (132) 『細川両家記』 天文二十年三月十四日条(『群書類従』二十輯合戦部)。
- (133) 『敵助往年記』 天文二十年七月十四日条。
- (134) 『鹿苑日録』 天文十八年六月二十七日、八月十六日条。

- (135) 『お湯殿の上の日記』 天文二十年十月二十八日条。
- (136) 『お湯殿の上の日記』 天文二十年四月五日、十月九・二十一日条。
- (137) 「歴名土代」(『群書類従』二九輯、雑部)。
- (138) 『言継卿記』 天文二十一年正月二十八日条。
- (139) 『言継卿記』 天文二十一年正月二十九日条。
- (140) 「嚴助往年記」 天文二十一年二月条。
- (141) 『言継卿記』 天文二十一年正月二十九日、三月五日条。
- (142) 「嚴助往年記」 天文二十一年八月条。
- (143) 『言継卿記』 天文二十一年三月十一日条。
- (144) 「嚴助往年記」 天文二十一年十一月条。
- (145) 『言継卿記』 天文二十一年十一月二十七・二十八・三十日、十二月一・五・六・十一・十七日条。
- (146) 『言継卿記』 天文二十二年正月四・五・二十八日、閏正月一・八日条。「嚴助往年記」 天文二十二年閏正月条。
- (147) 『言継卿記』 天文二十二年二月九・十二・二十三・二十六日条。
- (148) 前掲注(96) 天野著書、六五頁。
- (149) 『言継卿記』 天文二十二年二月二十七・二十八日、三月八日条。前掲注(83) 山田、口頭発表。
- (150) 『言継卿記』 天文二十二年四月九日条。
- (151) 『言継卿記』 天文二十二年七月十四・二十八・三十日、八月一・二・五・七・八・十四日条。「嚴助往年記」 天文二十二年八月三十日条。
- (152) 西島太郎「戦国期室町幕府と在地領主」 八木書店、二〇〇六年、三二七頁。松田盛秀は、京都に戻ったことが確認できるので省いた。(『言継卿記』 弘治二年正月十二日条)。
- (153) 『言継卿記』 天文二十二年八月十四日条。
- (154) 『言継卿記』 天文二十二年八月七日、九月七日、十月二十一条。「増補八坂神社文書」 臨川書店、一九九四年、三〇八、三〇九号。
- (155) 『公卿補任』 天文二十二年条。
- (156) 『言継卿記』 天文二十三年正月二十二・二十九日、三月二十五・二十六日条。
- (157) 『言継卿記』 弘治二年九月十一日条。
- (158) 『言継卿記』 永祿元年三月十五日、五月三・四日、六月二・四・七・八・九・十二日条。
- (159) 「兼右卿記」 永祿元年九月十六日条(東京大学史料編纂所架蔵影写本)。
- (160) 『お湯殿の上の日記』 永祿元年十一月二十七日条。
- (161) 『言継卿記』 永祿元年六月二日条。前掲注(83) 山田、口頭発表。
- (162) 「雑々間檢書」(武家故実雑集) 国立公文書館蔵写本。
- (163) 同前。
- (164) 同前。
- (165) 同前。
- (166) 「兼右卿記」 永祿二年七月八日条。
- (167) 『お湯殿の上の日記』 永祿三年六月十九日条。
- (168) 「兼右卿記」 永祿三年正月十日条。
- (169) 『言継卿記』 永祿二年八月一日条。
- (170) 『言継卿記』 永祿二年二月一・七日条。
- (171) 「嚴助往年記」 永祿二年四月条。
- (172) 『お湯殿の上の日記』 永祿二年九月二十六日条。「言継卿記」 永祿三年正月二十一日条。
- (173) 「雑々間檢書」(国立公文書館蔵写本)。「お湯殿の上の日記」 永祿三年正月二十七日、二月二十六日条。
- (174) 『言継卿記』 永祿二年七月二十二・二十二日条。
- (175) 『お湯殿の上の日記』 永祿三年二月二十七・二十八日、三月五・二十九日条。
- (176) 「光源院殿御成記」 国立公文書館蔵写本。「三好亭御成記」(『統群書類従』二二輯下)。
- (177) 高橋康夫『洛中洛外』 平凡社、一九八八年、一八七頁。
- (178) 前掲注(96) 天野著書、一二七頁。
- (179) 「穴太記」 茨城県立歴史館蔵酒泉家本。
- (180) 前掲注(96) 天野著書、一四七頁。馬部隆弘「信長上洛前夜の畿内情勢」(『日本歴史』七三六、二〇〇九年)。
- (181) 「嚴助往年記」 永祿四年六月条。

- (182) 「細川両家記」永禄四年五月条。
- (183) 「河野文書」「本福寺文書」(『愛媛県史』資料編古代、中世、一九八三年) 一八三五、一八三七号。
- (184) 『お湯殿の上の日記』永禄五年三月六日条。「蔽助往年記」永禄五年三月六日条。
- (185) 『お湯殿の上の日記』永禄五年五月十九日条。
- (186) 『お湯殿の上の日記』永禄五年六月二日条。
- (187) 『お湯殿の上の日記』永禄五年八月二十五～二十八日条、九月十一日条。
- (188) 『お湯殿の上の日記』永禄五年四月十一日条。「長享畿内兵乱記」永禄五年七月十三日条。「東寺過去帳」(『後鑑』永禄五年七月十三日条)。
- (189) 『お湯殿の上の日記』永禄五年八月二日条。
- (190) 『蜷川家文書』七八〇号。
- (191) 『言継卿記』永禄六年三月十九日条。
- (192) 『蔽助往年記』永禄六年二月四日条。
- (193) 『東寺光明講過去帳』(東京大学史料編纂所架蔵謄写本)。
- (194) 拙稿「上杉本洛中洛外図屏風の主題と制作目的」(『史艸』五七、二〇一六年)。
- (195) ルイス・フロイス『日本史』第一部六五章。
- (196) 『河野家文書』(伊予史料集成) 一六八号。
- (197) 『言継卿記』永禄八年五月十九日条。
- (198) 『言継卿記』永禄八年五月二十四日条。
- (199) 『細川両家記』永禄八年五月十九日条。
- (200) 『河野家文書』(伊予史料集成) 一六八号。 (史学専攻博士課程後期三年)
- (201) 天野忠幸『戦国期三好政権の研究』清文堂出版、二〇一〇年、三二六頁。
- (202) 『東寺光明講過去帳』(東京大学史料編纂所架蔵謄写本)。
- (203) 『公卿補任』永禄九年、近衛前久項。「大覚寺門跡略記」(『続群書類従』四輯下補任部)。
- (204) 『大日本史料』十編一冊二〇頁・二冊七十二頁・六冊二頁。
- (205) 金子拓「久我晴通の生涯と室町幕府」(『織田信長権力論』吉川弘文館、二〇一五年)。
- (206) 『言継卿記』天文十八年八月二十七日、天文二十一年三月九・二十日、八月十二日、年。
- (207) 十二月五日、天文二十三年二月十九日条。田中信司「松永久秀と京都政局」(『青山史学』二六、二〇〇八年)。
- (208) 『言継卿記』天文二十一年九月二十三日条。
- (209) 『福井県史』通史編二、中世、(金龍静、松原信之執筆) 一〇一～一〇二頁。
- (210) 『専修寺文書』(『福井県史』資料編二、中世) 一七～二四、二六～三一、三五～四二号。前掲注(5) 高梨論文。
- (211) 『蜷川家文書』七六四～七七〇、七七三～七七五号。
- (212) 『お湯殿の上の日記』永禄六年十二月七日、閏十二月二十六日条。「素絹記」(続群書類従二八輯下釈家部)。
- (213) 『穴太記』茨城県立歴史館蔵酒泉家本。
- (214) 『吉川家旧蔵文書』(『広島県史』古代中世資料編V) 六頁。
- (215) 『吉川家旧蔵文書』一、(『広島県史』古代中世資料編V、六頁)。山田康弘「戦国期將軍の大名間和平調停」(『中世政治史の研究』日本史史料研究会論文集1、日本史史料研究会、二〇一〇年)。
- (216) 『言継卿記』永禄七年五月十九日条。
- (217) 『久志本年代記』永禄七年五月条(東京大学史料編纂所架蔵謄写本)。
- (218) 『雑々聞檢書』(国立公文書館蔵写本)。
- (219) 『お湯殿の上の日記』永禄七年九月十一日条。
- (220) ルイス・フロイス『日本史』第一部五七章。

Life of Keijyu-in who order Uesugi-hon Rakutyu-Rakugai-zu Folding Screen

KOTANI Ryoko

[Abstract] Keijyu-in was the wife of the 12th Shogun Yoshiharu

Ashikaga of *Ashikaga* Shogunate. Her father was *Naomichi Konoë* who was the chief adviser to the Emperor.

She ordered the *Uesugi-hon Rakutyu-Rakugai-zu* Folding Screen (A national treasure owned by Yamagata Prefecture Yonezawa City Uesugi-Museum)

She had 2sons and 1daughter, but she and her first-born son *Yoshihite Ashikaga* were killed by vassal *Miyoshi Yoshitugu* in1565. She was 52 years old.

Her life is important for we know the history and the arts of the time, *Yoshiharu* and *Yoshihite* Shogun. She was a leader in the *Ashikaga* Shogun family during the *Yoshihite Ashikaga* Sougun days, and her brothers supported her family. Her brothers were *Konoë Taneie, Dozo, Gisyun,* and *Harunichi Koga.* *Yoshiharu* and *Yoshihite Ashikaga* were most trusted them.

The *Konoë* family was a very good family. She was there fore, a very happy girl. But, *Konoë* family lost many assets in wars. *Keiyu-in* married *Yoshiharu Ashikaga* to maintain the *Konoë* family assets and rank. *Yoshiharu Ashikaga* was fleeing to the *Kuwanomi-temple* in *Omni* land during the on wedding time. He was losing assets and rank too, so *Yoshiharu Ashikaga* gave a picture roll (*Kuwanomi-Temple Story-Emaki*) to her as a marriage proposal. This *Emaki* is owned by the *Kuwanomi-Temple* now.

Soon after the wedding, they could go back to Kyoto. *Yoshiharu* and *Keiyu-in* were happy, as was the *Konoë*-family. But *Yoshiharu* died in 1550, while *Yoshihite* (first son) was still 15 years old, so the *Keiyu-*

in and *Konoë* brothers were guardians for *Yoshihite*. She had highly regard by people, and she ordered the *Uesugi-hon Rakutyu-Rkugai-zu* Folding Screen for the memorial of *Yoshiharu*.

However, *Miyoshi Yoshitugu* killed *Keiyu-in* and *Yoshihite* suddenly, to take political power. *Keiyu-in* could not see the *Uesugi-hon Rakutyu-Rkugai-zu* Folding Screen, but *Eitoku Kano* continued drawing it, until it was finished. It was very fantastic, and people were surprised when they saw it. It was owned by her second son, but he was banished from Kyoto by *Nobunaga Oda* in 1573.

Nobunaga gave the *Uesugi-hon Rakutyu-Rakugai-zu* Folding Screen to *Uesugi Kenshin* for his alliance with him.

The *Uesugi-hon Rakutyu-Rakugai-zu* Folding Screen was held by the *Uesugi* family for 400 years. It is one of the most famous pictures in Japan. *Keiyu-in* is an important person in Japanese history and arts.

[**Keywords**] *Keiyu-in, Uesugi-hon Rakutyu-Rakugai-zu* Folding Screen, *Kuwanomi-Temple Story-Emaki, Konoë* brothers, *Yoshihite Ashikaga*